

藻類学ワークショップII 「福岡の藻類 採集・観察会」に参加して 秋田晋吾

本ワークショップは2部で構成され、2015年3月23日から24日に福岡県福津市津屋崎にある九州大学大学院農学研究院附属水産実験所で「微細藻と海藻の採集・同定会」、25日に希望者のみを対象として福岡県朝倉市で「スイゼンジノリ養殖・加工場見学、オキチモズクの生育地観察会」が開催されました。私は、これまで藻類学会のワークショップに参加したことがありませんでした。しかし、館山や伊豆半島をフィールドとして海藻の生態を勉強している私にとって、九州で海藻の採集ができるうえに、普段はほとんど触れることのない微細藻も学べる良い機会だと考え、参加を決めました。

私は、最終講演のシンポジウムが終わると、箱崎から電車とバスで津屋崎まで移動しました。実験所に着いたあと、22日に移動した参加者で懇親会を行いました。翌朝9時までは全ての参加者が合流し、ワークショップIIの初日が始まりました。

まず、実習室で川口先生からスケジュールの説明があった後、参加者それぞれが簡単な自己紹介を行いました。九州工業大学の先生と学生、民間企業の研究者の方も参加しており、藻類は幅広い分野で興味を持たれていることを改めて実感しました。

午後に最干潮を迎えるため、初日の午前中は、微細藻採集班、打ち上げ海藻採集班、潜水採集班の3班にわかれ、午後は、参加者全員で磯採集を行いました。私は、微細藻の採集を勉強するために実習船に乗りました。講師の高橋先生が、乗船前にプランクトンネットの仕組みと操作方法について説明して下さいました。プランクトンネットで採集した微細藻をポリボトルに入れて持ち帰りますが、サンプリング前にボトルを海水で共洗いすることが重要であると教えられました。採集ポイントに着くと、まず、環境条件の測定、そして重要な共洗いをし、ポリボトルに海水を汲んだ後、プランクトンネットで採集した微細藻をボトル

に入れました。下を向いての作業が多く、船酔いに強くてよかったですと感じました。昼食後、磯採集に出発するまで採集物の同定・観察作業に専念しました。

磯採集は、実習所から徒歩で2、30分の距離にある広い砂浜に岩礁域が突き出た海岸で行われました。そこは、恋の浦という素敵な地名でした。潮間帯上部には、シオグサ類、アオサ類、カヤモノリ、中部～下部には、ヤナギモク、ヨレモクなどのホンダワラ類が生育していました。(各自)思い思いの磯採集を終えた帰り道、津屋崎干潟へ立ち寄り、泥と一緒に着生珪藻類を採集して帰りました。

実習室では、押葉標本の作成、顕微鏡観察など、それぞれの目的に沿った作業に没頭していました。私は、なるべくたくさんの海藻に触れて帰ることが目的でした。関東では見ることのないヤナギモクやツルアラメを生で観て触ることができ、勉強になりました。さらに、講師の1人である川口先生からムカデノリ *Grateloupia asiatica* とヒロハノムカデノリ *G. subpectinata* の違いなど、非常に貴重なお話を聞くことができました。両種は付着器の少し上を触ると区別できるそうで、ムカデノリは扁平で固く、ヒロハノムカデノリは分厚いそうです。また、作業を通して、種同定に関する情報や知識を参加者同士で活発に交換し、また同定された海藻を皆で写真を撮り合うという光景がよく見られました。

同定・観察作業はとても楽しく、あっという間に時間は過ぎ、夕食の時間となりました。実験所に宿泊できる人数が限られるため、先生方は民宿に移動され、懇親会は2会場それぞれに分かれて行われました。

二日目は、同定作業の続きと片付けでした。私も含め、24日にそれぞれの職場や下宿先に帰る参加者がほとんどで、25日も参加する8名が実験所に残りました。私の大学では25日に卒業式が予定されていたため、スイゼンジノリとオキチモズクの観察会への参加は諦めました。



集合写真(写真提供:上井進也氏)



微細藻班の観察・同定(写真提供:小亀一弘氏)

本ワークショップでは、学会とは違った雰囲気先生方や学生と交流ができ、また藻類の知識を深めることができただけでなく、様々なことを感じとることができた二日間となりました。特に、参加者それぞれの研究対象への情熱を肌で感じ、自分の海藻愛はまだまだ足りないのではないかと強く思いました。また、自分の知識量が足りないことも再認識できました。さらに、海藻の情報交換や今後の研究について様々なアドバイスをいただくことができ、非常に濃密な時間を過ごすことができました。次回のワークショップも必ず参加しようと思いました。そして、次回も有意義な情報交換ができるよう、頑張っ研究を進めるだけでなく幅広く藻類の知識を深めていこうと決意しました。

最後に、この企画・準備・運営にご尽力いただいた九州大学の川口栄男先生、栗原暁先生、ワークショップII講師陣の諸先生方、九州大学大学院農学研究院附属水産実験所職員の皆様はこの場を借りて深く感謝申し上げます。

(東京海洋大学)



海藻班の観察・同定 (写真提供：上井進也氏)

藻類学ワークショップII参加者一覧 (五十音順, 敬称略)

【学生】秋田 晋吾 (東京海洋大)・上嶋 崇嗣 (山梨大)・牛島 圭 (九州工業大)・腰田 有 (北海道大)・丹羽 一夫 (福井県立大)・中村 誠司 (山梨大)・中村 方哉 (筑波大)・Wilfred J. E. Santiañez (北海道大)

【一般】石本 美和 (一般財団法人 地球・人間環境フォーラム)・上井 進也 (新潟大)・加藤 亜記 (広島大)・小亀 一弘 (北海道大)・白石 英秋 (京都大)・芹澤 如比古 (山梨大)・松岡 孝典 (日本歯科大)・丸島 和也 (キッコーマン株式会社)・脇坂 港 (九州工業大)

【講師】岩滝 光儀 (東京大)・神谷 光伸 (福井県立大)・川口 栄男 (九州大)・河地 正伸 (環境研)・鈴木 秀和 (東京海洋大)・高橋 和也 (山形大)・藤田 大介 (東京海洋大)

【淡水藻ガイド】飯田 大和 (オキチモズクを見守る会)・遠藤 淳 (遠藤金川堂)

【世話人】栗原 暁 (九州大)



磯採集

日本藻類学会第39回福岡大会を降り返って

栗原 暁

縁あって第39回福岡大会の準備委員として大会準備・運営に携わることとなった。円滑に終われるよう微力ながら準備を進めてきたが、各参加者が持たれた印象はどんなものだったのだろうか。大事には至らなかったが、不便に感じた参加者も多かったのではないかと思う。例えば、狭い一般発表会場、出力が弱すぎるレーザーポインター、分かりづらいポスター発表会場案内板、ワークショップIIの準備不足など、挙げればきりが無い。箱崎キャンパスでの開催で年代物の講義棟を使わざるを得なかった事情を除けば、大方、筆者の至らなさが招いた結果である。ここに謹んでお詫び申し上げる。

万が一、また学会開催のお声がかかったときには今回の反省を活せたらと思う。以下、簡単ながら本学会の開催内容について振り返りたい。

本大会への参加者は252名(一般152名・学生86名・招待5名・高校生8名+引率教員1名)で、そのうち海外からの参加は米国1名、韓国2名であった。本大会では、高校生による発表申込が1件あった(滋賀県立守山高等学校・文部科学省スーパーサイエンスハイスクール指定校)。発表は学会員に限るのが原則だが、非会員である高校生の発表について学会執行部で協議してもらい、本大会では例外的に参